
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。無断引用や転載をお断りいたします。
Copyrighted materials of the authors. Works in progress: Please do not circulate
or cite without permission.

新型コロナ感染拡大下における芸能に関する学際的研究

第5回研究会（2022年7月10日開催）報告

日時:2022年7月10日

場所: オンライン開催

内容: 冒頭で、代表者の吉田より、研究グループの活動状況や今後の予定について説明があった。その後、コロナ状況下における欧米や日本の劇場での試みについて(大田美佐子/神戸大学)、またドイツの劇場での多様多彩な試みと戦時下のウクライナ情勢を反映した試みなど(庭山由佳/国際演劇協会)について報告した。海外渡航の制限も徐々に緩和されつつある現状を踏まえて、大田は「Covid-19 ショックとその歴史的視座 – 劇場での舞台公演に関連して」というタイトルで、Covid-19 ショックが劇場文化に与えたインパクトを具体例を示しながら報告した。ベルリン在住でドラマトゥルクとして活動し、劇場制作側からの視点も持つ庭山の発表は「コロナ禍とロシアウクライナ侵攻を経た、ドイツの劇場の実践と文化支援」と題して、ドイツの劇場を例に、徹底して組織化された Covid-19 状況下の多様多彩な例を、豊富な視聴覚資料で報告、紹介した。また、ウクライナ情勢に関しては、社会情勢に対して公的機関、公共機関としての責務を持つドイツの劇場の試みの具体的な例を知る貴重な機会となった。特に、二つの発表に共通する点としては、劇場が Covid-19 の状況下での状況を「作品創造」の視点から捉え直し、劇場の社会的責務を発信する機会とした点が挙げられる。質疑応答では、公的組織とフリーランスの格差の問題などにも関心が寄せられた。それぞれの報告の概要は、以下の通りである。

報告 1

「Covid-19 ショックとその歴史的視座 – 劇場での舞台公演に関連して」

大田美佐子

大田は、問題意識を喚起した「Covid-19 ショックの始まり」を序とし、Covid-19 状況下

に劇場で行われた試行錯誤について、以下の三つの視点から問題を整理した。1. 記録: 「不可能性」の記録と提示、その効果。 2. 対話: 見えない繋がりを可視化する。3. 「代替」を超えて「進化」へ。序では、2020年春の時点でのコロナの状況に直面した社会と劇場の問題意識を整理した。続く1番目の視点「記録」では、記録の重要性が高まり、「できなかった」事業を積極的に記録し、広く共有することで、中心と周縁(都心と地域など)の発信力や制作力のフラット化の可能性を指摘した。2つ目の「対話」では、これまで見えてこなかった劇場間の「制作」同士の繋がりや実務家の発言の重みについて、「人種」格差の問題を議論すること、「聴衆」との対話を例に挙げ、それぞれの具体的な試みを紹介した。これらが「可視化」することによって、業界内の問題意識が喚起され、具体的な問題解決に進む可能性と実際の事例が報告された。3番目は「代替」を超えて「進化」に結びつく視点で、「新しい演劇の発想」を促し、具体的な上演のかたちに落とし込んでいった複数の国内海外の事例を視聴覚資料で紹介した。

(文責 大田美佐子)

報告2

「コロナ禍とロシアウクライナ侵攻を経た、ドイツの劇場の実践と文化支援」

庭山由佳

庭山は、コロナ禍とロシアウクライナ侵攻に際して、ドイツの劇場と文化セクターがいかに対応しているかを、視聴覚資料を示しながら報告した。配信作品制作、対面が許可されてからの段階的緩和に伴う上演形態、客席に個室ボックス席を備えた劇場の建設、劇場ではない場所を転用しての配信、開演前の無料抗原検査がセットになったチケットの販売等、あらゆる面で創意工夫の光る実践の数々を紹介した。続いて、ロシアウクライナ侵攻後、ベルリンの街が一丸となって戦争難民を受け入れたプロセス、劇場でのチャリティー公演がどのように組織され支援金が集められたのか、反体制派ロシア人アーティストの亡命申請をどう受け入れたか等を紹介。最後に、ドイツの歴代の政治家達による文化支援、メルケル政権時のコロナ対応を示し、まとめとした。

(文責 庭山由佳)